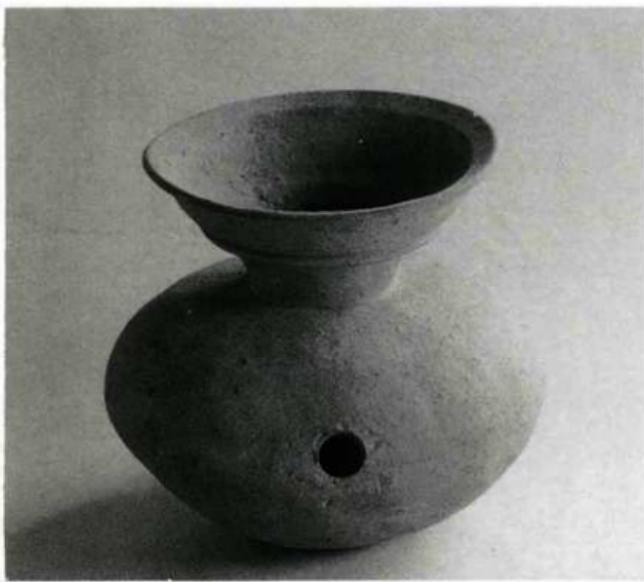


## 北原牧地区遺跡

(上菌遺跡・東牧B遺跡)

県営農村基盤総合パイロット事業（尾鈴二期地区  
北原牧工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告



(上菌遺跡H-2号住居出土須恵器)

1 9 8 9 • 3

宮崎県新富町教育委員会

## 序

新富町教育委員会では、県営農村基盤総合整備パイロット事業に伴い、昭和59年度より遺跡の発掘調査を実施しています。

本年度は、昭和63年7月から平成元年1月にかけて北原牧地区遺跡（上蘭遺跡：第3次調査）の調査を行いました。

本書はその概要報告書であります。

東牧B遺跡は縄文・弥生時代、上蘭遺跡は古墳時代～中世にわたる複合遺跡です。

今回の調査では、東牧B遺跡は縄文時代の集石造構、弥生時代の住居跡とそれにともなう縄文土器、剝片、弥生土器が出土し、上蘭遺跡からは、古墳時代の竪穴住居跡など検出され、特に鉄製釣針や緑色顔料など貴重な遺物が出土いたしました。

これらの貴重な資料をもとに、本町の古代史解明の一助にしたいと思っております。

なお、調査に際しましては、宮崎県文化課、各関係機関、調査指導の先生方をはじめ、発掘作業に従事くださいました皆様に心より感謝申しあげますとともに、調査に御協力、御理解いただいた地元の方々に対しましても厚くお礼申しあげます。

また、本書が、社会教育、学校教育ならびに文化財保護のため、活用いただけることを期待します。

平成元年3月

新富町教育委員会

教育長 小田幸一

## 例　　言

1. 本書は、新富町北原牧地区における県営農地保全整備事業の計画に伴い昭和63年度に実施した北原牧地区遺跡（東牧B遺跡・上蘭遺跡）の概要報告書である。

2. 調査組織は次のとおりである。

調査主体 新富町教育委員会

教育長 小田幸一

社会教育課長 比江島武士 同主事 松原富美彦（事務担当）

同補佐 井下吉盛 同主事 有田辰美（調査担当）

特別調査員 国立奈良文化財研究所埋蔵文化財センター

発掘技術研究室長 西村康

調査協力 宮崎県教育庁文化課

3. 本書に掲載した図は、有田の他、日高里子、小野光子、上里京子が行い、遺物実測図は、日高が、トレースは有田がこれを作成した。

4. 本書の執筆、編集は有田が行った。

## 本文目次

第Ⅰ章	調査に至る経緯	1
第Ⅱ章	遺跡の立地と環境	2
第Ⅲ章	遺跡の概要	3
上蘭遺跡		
東牧B遺跡		
第Ⅳ章	ま　と　め	10

## 挿図目次

第1図	周辺遺跡位置図	1
第2図	上蘭遺跡（H地区）遺構分布図	4
第3図	上蘭遺跡（H地区）出土土器実測図1	5
第4図	上蘭遺跡（H地区）出土土器実測図2	6
第5図	東牧B遺跡1号集石遺構実測図	8
第6図	東牧B遺跡1号住居遺構実測図	9

## 第Ⅰ章 調査に至る経緯

昭和61年度、新富町大字日置（ひおき）と三納代（みなしろ）にまたがる通称「北原牧（きたばるまき）台地」・約80haにおいて、県営農地基盤整備事業が計画され、この中を2～3ヶ年次計画で実施するものであった。

こうした中、事業対象地内の埋蔵文化財については、昭和56年に町教育委員会が実施した「町内遺跡詳細分布調査」の際、上蘭遺跡・西牧遺跡・藏蘭遺跡・北原牧遺跡等が確認されており、昭和61～2年の農政部局と文化財保護部局との調整、文化財保護部局の独自の成果にあわせ、昭和61～2年の発掘調査の成果を踏まえ、宮崎県教育委員会文化課、県一ヶ瀬土地改良事務所、一ヶ瀬土地改良区、新富町教育委員会、町耕地課の間で事業対象地内に存在する埋蔵文化財について協議を重ねた結果、新たに東牧遺跡（B遺跡：縄文時代早期～前期の集石遺構が主）で保存に留意し、事業施工上、現状保存が困難な一部分においては、やむなく記録保存の措置をとることとなった。



本年度の調査は、新富町教育委員会が主体となり、現地調査は上蘭遺跡H地区が昭和63年7月25日～9月10日、東牧B遺跡が昭和63年9月12日～平成元年1月31日の各々の期間に行い、県教委文化課に指導を頼いた。なお、上蘭遺跡H地区では、特に国立奈良文化財研究所埋蔵文化財センターにお願いし、磁気探査のため、発掘技術研究室長西村康氏を派遣して頂いた。

## 第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

新富町は、県都宮崎市の北約20kmにあり、西に西都市、北に高鍋町、南に一ヶ瀬川を界し、佐土原町に接し、東側を日向灘に臨む位置にあり、その町域は一ヶ瀬川左岸の主に水田に利用される沖積平野と畑作に利用される洪積台地に占められている。この洪積台地は広く宮崎平野に広がる平坦面の顯著な段丘地形となっており、地形区分でいう茶臼原面（海拔約120m）三財原面（海拔約90m）、新田原面（海拔約70m）の三つに分けられる。

東牧B・上蘭遺跡は、新富町大字日置（ひおき）と三納代（みなしろ）の大字界となる通称「北原牧（きたばるまき）」に所在し、北側の日置川（へきがわ）と南側の鬼付女川（きづくめがわ）にはさまれた標高70～72mの洪積台地が東に舌状に張りだす部分に立地しており、東牧B遺跡と上蘭遺跡の位置関係はこの同じ台地の間を深い開析谷で分断され相対した形となっている。

この上蘭遺跡の周辺には、古墳時代の遺跡が比較的多く、西へ約600mには県指定史跡富田古墳（とんだこふん）2～6号墳（円墳－4、6号のみ墳丘あり）があり、これを含む藏園（くらぞの）A・B、藏園第II、北原牧の各遺跡からはこれまでに合計円墳21基、地下式横穴墓（ちかしきおうけつぼ）3基が確認されており、このうち地下式横穴墓は、初めて一ヶ瀬川（ひとつせがわ）を越えての分布として注目されている。東へ約400mの丘陵の裾には横穴墓約10基も分布する。また南東にのびる丘陵には昭和56年に調査されたあぶみ遺跡があり、弥生時代中期の住居跡やV字状の溝があり、葺石（ふきいし）を二条に巡らしたあぶみ古墳も確認されている。このあぶみの丘陵は富田古墳の密集地でもある。なお北東700mの日置川対岸の台地には古墳時代後期の小集落である藤掛（ふじがかり）遺跡がある。

## 第Ⅲ章 遺跡の概要

### 上薦遺跡H地区

#### 〈調査区の概要〉

H区は、昭和62年度調査を行ったE区に平行した北側にあたり、東西約45m、南北45mの調査区で、調査の便宜上、間に廃土置場（南北約10m、東西約45m）を挟み南北にそれぞれH北区（約800m<sup>2</sup>）H南区（約800m<sup>2</sup>）に分けて発掘調査を行った。

なお、当地の基本土層は、第Ⅰ層表土（耕作土）、第Ⅱ層黒色土層、第Ⅲ層アカホヤ層、第Ⅳ層暗褐色ローム層（含小白斑）、第Ⅴ層黒褐色ローム層、第Ⅵ層明褐色ローム層であり、H区全体のうち西側に第Ⅱ層の黒色土が多く堆積していた。検出された堅穴住居およびピットは第Ⅳ層の暗褐色ローム層まで掘り込まれ、一部第Ⅴ層の黒褐色ローム層まで達するものもあった。また、南区はアカホヤ層上面での確認の結果、近年の大型農業機械による深耕のため東西方向に筋を引いたような状況で攪乱されていた。

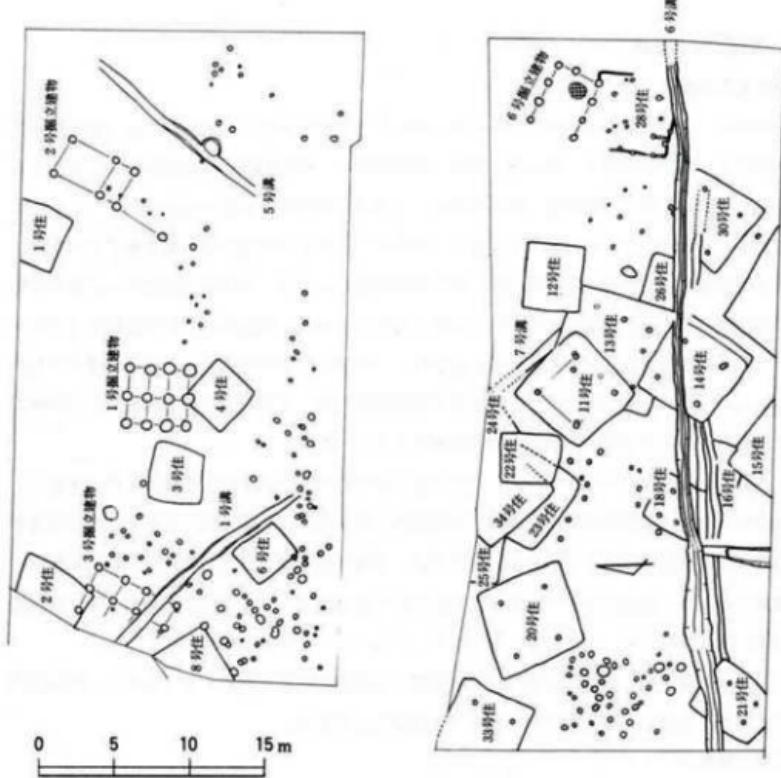
調査の結果、確認された遺構は、北区で主に古墳時代後期の堅穴住居跡が7軒（未掘1、痕跡のみ1）、奈良時代のカマド付堅穴住居跡1軒、奈良～平安時代と思われる掘立柱建物3棟、溝状遺構3条、などである。南区では、古墳時代後期の堅穴住居跡が23軒（未掘1、痕跡のみ4）、奈良時代のカマド付堅穴住居跡1軒、奈良～平安時代と思われる掘立柱建物1棟、溝状遺構5条（うち中世1）などでこの他にピットが多数検出されている。

出土した遺物としては、古墳時代の須恵器・土師器・鉄器（釣針・刀子など）、奈良時代の須恵器・土師器、平安時代の須恵器・土師器などがある。

#### 〈堅穴住居〉

古墳時代後期の堅穴住居は、30軒すべてほぼ方形プランをとり東西約740cm、南北735cmで床面積約54.39m<sup>2</sup>の6本主柱の13号住居を最大とし一辺約4～5mが平均的規模で柱穴は、一部未検出を含めてそのほとんどが4本主柱であり、4本主柱に囲まれる中央部にはよく踏み縮まった硬化面があり、屋内炉として、その中央部を僅かに掘り込んだ焼土面があるものが11軒とほとんどであり、また、中央部に土師器の入るだけの穴を掘り込み、甕を埋設した「埋甕」と呼ばれるものが2軒から検出されている。

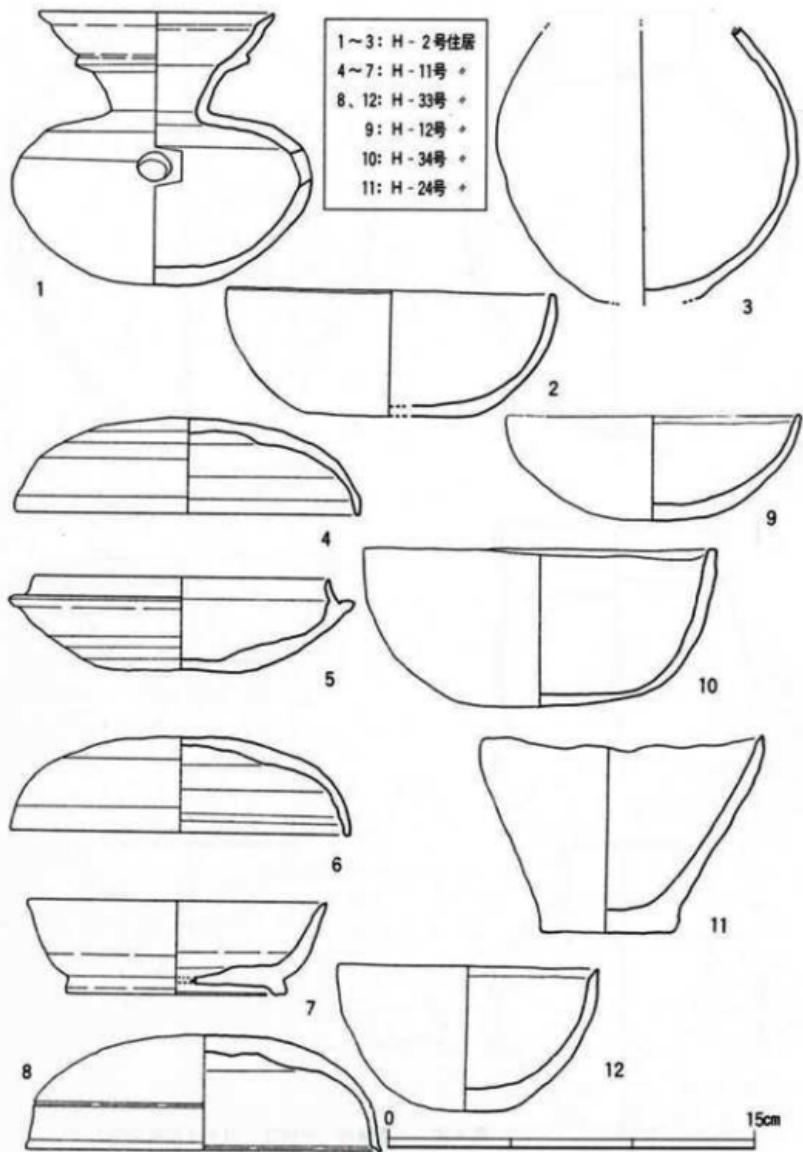
奈良時代のカマド付堅穴住居は3号住居と22号住居の2軒で3号住居は東西390cm、南北約340cmで床面積約13m<sup>2</sup>の小型の住居で北辺の中央壁際にカマドを有し、掘り込み煙道はもたない。22号住居は一辺390cmで床面積約14m<sup>2</sup>内外の同じく小型の住居で北辺の中央壁際にカマド



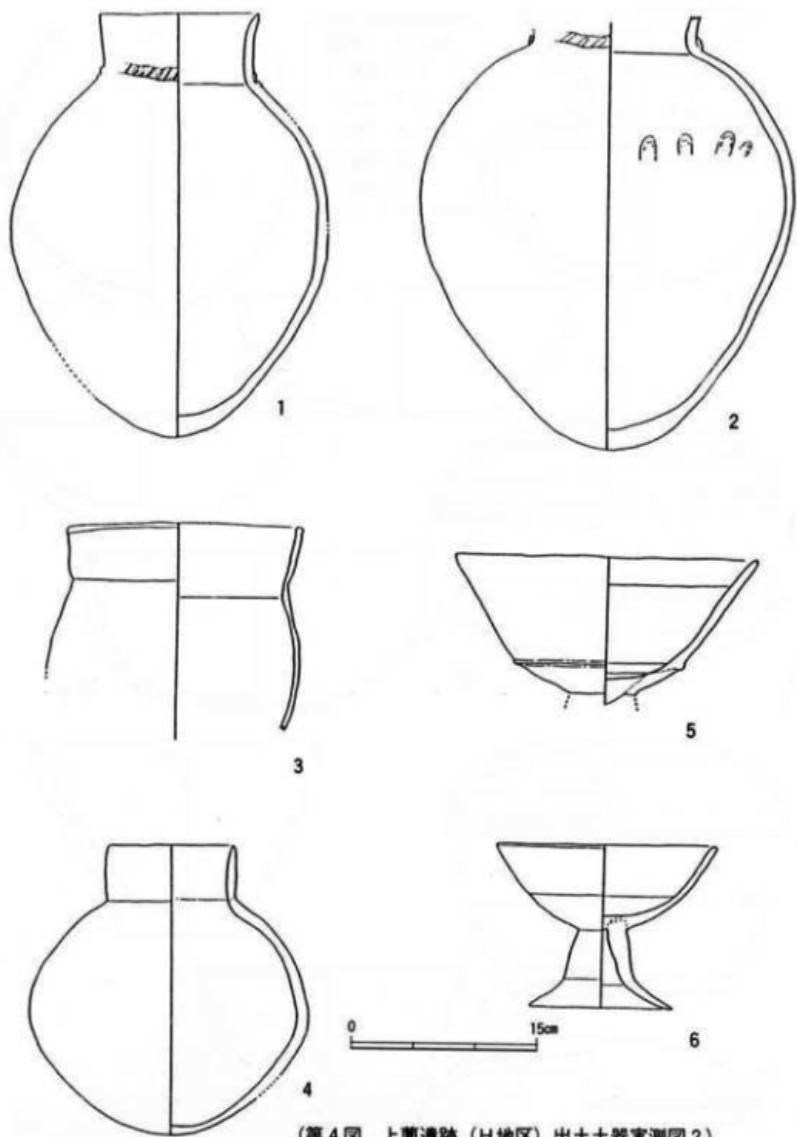
(第2図 上西遺跡 (H地区) 遺構分布図)

を有しており、床面より須恵器の环の口縁部（高台付块？）が出土し、8世纪中～後半に比定される。

掘立柱建物は4棟が確認されているが古墳時代に上る可能性は小さく、奈良～平安時代と思われる。1号掘立柱建物は東西約400cm、南北420cmの南北に長い $2 \times 3$ 間の総柱で柱穴は径80cm内外と大きく規格的に整然としていた。2号掘立柱建物は東西約480cm、南北276cmを基本的に $3 \times 1$ 間として北側の2番目の柱穴を各々欠いている変形掘立柱建物で更に北西側柱列に連なると考えられる柱穴が南側に一つ確認されている。3号掘立柱建物は東西約310+



(第3図 上菌遺跡(H地区)出土土器実測図1)



(第4図 上菌遺跡 (H地区) 出土土器実測図 2)

$\alpha$  cm、南北596cmで確認されているのは $3 \times 2$ 間であるが基本的に $3 \times 3$ 間の縦柱の可能性が強い。南区6号掘立柱建物は東西約420cm、南北300cmを基本的に $3 \times 2$ 間とし、西側の真ん中の柱穴を欠いており、西側に開いた「コ」の字形となっている。また東側の柱穴に囲まれる部分には約80cmの円形に掘り込まれた土塙があり、その中には焼土が詰まった状態で炉の可能性が考えられる。この他に多数のビットが確認されているが整理が進めば掘立柱建物が更に増加するものと思われる。

#### ＜遺物＞

未整理の段階であるが全体の約 $2/3$ が削平を受けていた2号住居に特徴的な一括資料があるので中心に紹介しておく。（第3図1～3、第4図1～6参照）

1は、2号住居の東側壁下に横に倒れた状態で出土した須恵器の壺の完形品でこの中からは、分析途中であるが鉛物系緑色顔料が確認されている。この壺は、口縁径が胴部径より小さい短頸で口縁部外面に段を有する整美な古式の様相を呈している。口縁および胴部外面は丁寧なヨコナデがなされている。2は土師器壺で約 $1/5$ の残存。胎土は精選され、内外面ともヨコナデ。3は土師器壺の口縁部と底部の一部を欠いたもの。第4図の1・2は土師器壺で胴部最大径を中位よりやや上にもち、頸部に絡み繩状突帯を巡らす。1の口縁はほぼ直立し、口唇部がやや開くのに対し、2は頸部から開き始める。外面の調整は1・2とも斜め下方方向のハケメで2の内面には指頭痕が残る。3の粗製の土師器壺で輪積み痕が良く残っている。調整は雑。4は小型の土師器壺で胴部最大径を中位にもち、ほぼ完形。胎土は精選され、外面の調整はハケメ仕上げ。5・6は土師器高壺。胎土は良く精選されている。5は壺部と口縁部との間に明確な棱をもち口縁部は大きく開く。内外面ともヨコナデ仕上げ。壺部と口縁部のみほぼ完形。6はほぼ完形で脚柱部をタテナデを除いて、内外面ともヨコナデ仕上げ。

その他には11号住居より須恵器の壺（第3図4～7）が出土している。4・6は壺蓋。5は壺身。体部外面は右回りの回転ヘラ削りの後、部分的にナデを行う。4・6と5はセット関係にあるが5は胎土がやや粗い。7は高台付碗でやや軟調な焼き上がりである。9は12号住居出土の土師器壺完形。胎土は精選され、内外面の調整はヨコナデ仕上げ。10は34号住居出土の土師器壺で約 $4/5$ の残存。口唇部は平坦に作り、内外面ともナデの後、ヘラ磨きを施す。10は24号住居出土の土師器鉢の完形でナデの後、斜め下方にヘラ磨きを施す。8と12は33号住居出土。8は須恵器の有蓋高壺の蓋とおもわれ、I期に比定される。口唇部内側に段をもち、外部上面は自然釉で一部黒色。この住居からは、この他に鉄製釣針も出土。

## 東牧B遺跡

### 〈調査区の概要〉

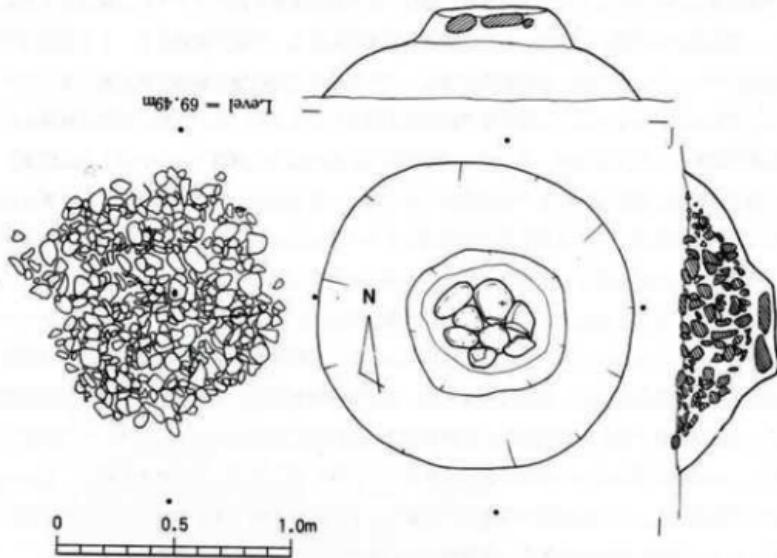
東牧B遺跡は、上薗遺跡の北方の深く開析された谷を隔てて東牧台地にあり、上薗遺跡にむかって張り出す僅かに傾斜する部分で縄文時代早～前期の集石遺構を主とする遺跡で発掘対象区約20,000m<sup>2</sup>のうち、東西約40m、南北38mの調査区で縄文時代早～前期の集石遺構が集中していた。この北側約100mには弥生時代後期とおもわれる住居跡1軒が確認されている。

出土した遺物は、集石遺構集中区より、貝殻条痕文土器を中心に押型文(山形文・楕円文)土器が多數出土している。このほかに混じりのない黒曜石製石器5点と黒曜石のチップが多數出土している。

集石遺構群の北約100mで基盤整備の為、表土剥ぎ作業中に確認された1号住居は、第V層暗褐色ローム層まで削平を受けていた。

### 〈集石遺構と遺物〉

集石遺構は未整理段階で、あわせて100余基が確認されている。1号集石(第5図参照)の典型的な集石は少なく、配石を持った遺構は僅か3基のみで、配石をもたないものも確認さ

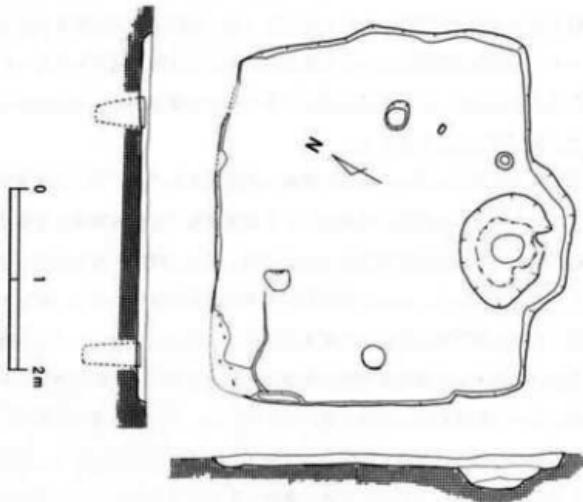


(第5図 東牧B遺跡 1号集石遺構実測図)

れている。その他には集石下の掘り込みが10~20cmの偏平なレンズ状のもの、礫は、ほとんどないが土塙の掘り込みが埋土より、ハッキリ確認されたものなど大きく、三つの形態が認められた。1号集石遺構は、径135cmとするほぼ円形の突レンズ状土塙で、土器等の遺物は確認されていない。

出土遺物は、集石遺構の数に比し、量的にかなり少なく、石鏃も4点、磨石2点、窪み石5点が確認されていみである。このことは、表土の削平が進んでいたことにも関連すると思われる。

集石遺構集中区より出土した土器には、貝殻条痕文を地文とした円筒型土器が多く出土しており、その中には、貝殻腹縁の押し引き文を地文に口縁外面に縦位に貝殻腹縁の刺突を行い、その上にクサビ型張り付け突帯が巡る吉田式土器などもみられる。この他には、山形押型文を横位に施した円筒式土器や、中形の楕円土器、貝殻腹縁刺突を縦位に全面施すもの、また無文土器などがあり、特に17号集石遺構の土塙より出土した貝殻条痕を外面斜面下方に全面施し、内面は、横ナデ、口縁部を丸くつくる復元口径46.3cmの大型の土器は器壁も厚く、口縁外面にヘラ状工具による刺突文を2列、巡らす。この土器の注目される点はその出土状態であり、土塙内壁面に張りついたもの、土塙内中位の礫層内出土土器、土塙外の焼石の散乱部分出土土器が一個体として復元できる。



(第6図 東牧B遺跡 1号住居遺構実測図)

### <1号住居の造構と遺物>

集石造構群の北約100mで表土剥ぎ作業中に確認された住居は床面までの僅か10cm内外と残りが悪く、東西約396cm、南北332cmで入り口と思われる南側中央部には外側に向かって張り出しており、合わせて床面積約13.52m<sup>2</sup>を計る。主柱は東西方向に2本の長方形プランで柱間を中心いて床面は小さく傾斜状を呈し、よく踏み締まった硬化面が認められた。東側主柱穴から南側の床面部分には壁際まで炭化物と焼土が多く認められた。遺物としては、弥生式土器の小片が中央部を中心に約10点があり、その中には刻み目突帯を持つ口縁部片や壺形土器の胴部と思われる小片、精選された胎土の高坏片が出土している。南側の土塙周辺床面よりは磨製石鎌の材料と思われる綠泥片岩チップが数点散布していた。

また、入り口と思われる南側張り出し部分の内側には、東西125cm、南北92cm深さ約25cmの楕円形の土塙があり、このなかから遺物として弥生式土器片約20点、挙大の砂岩数点や磨製石鎌の綠泥片岩チップが約20点あり、その中には磨製石鎌の未製品が認められ、入り口と思われる南側張り出しの採光条件と合わせ、この土塙の機能を暗示させている。

## 第Ⅳ章 ま と め

上蘭遺跡では、これまでに古墳時代の竪穴住居が一次調査で65軒、二次調査で194軒、今年度新たに30軒と合計289軒が確認されたことになった。D区とE区に挟まれる今年度のH区の調査で、一・二次調査で確認してきた集落内における住居の疎密からA・C区とその南側に当たるD区の北側部分、E区の西側部分が各々、この集落内の一つの中心を形成していくことを更に裏付けることとなった。

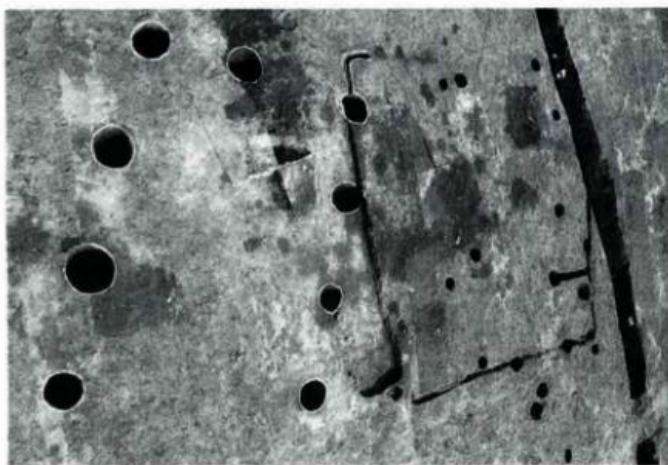
上蘭遺跡と谷を隔てて北側に広がる東牧B遺跡との関連をみていくと、上蘭遺跡の古墳時代後期の集落としての広がりが西側を墓地としての藏匿遺跡・北原牧遺跡、北側を東牧B遺跡との間の開析谷に、また、南及び東側を台地から続く侵食丘陵に区画される台地部分にはほぼ限定出来るものとおもわれる。なお、南西及び東側の侵食丘陵には各々、富田古墳群の中、特に集中する鐘の丘陵と横穴群の存在する墓地空間となっている。また、この上蘭遺跡の前時代にあたる弥生時代終末～古墳時代初期の集落の欠如と古墳時代後期の爆発的発生の意味の解明、本遺跡における集落形成の上限の確認が急がれる。逆に上蘭遺跡の周辺、北原牧台地にこれまで確認された住居跡が縄文時代～弥生時代と散発、断片的であり、本遺跡の在り方を特徴付けることになるようである。東牧B遺跡の集石造構については、事例の整理と検討が更にもとめられる。



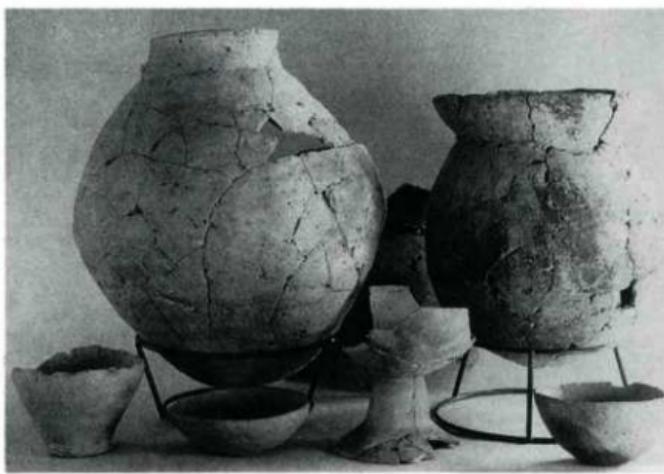
上菌遺跡H北区遺構全景



同上、(作業風景)



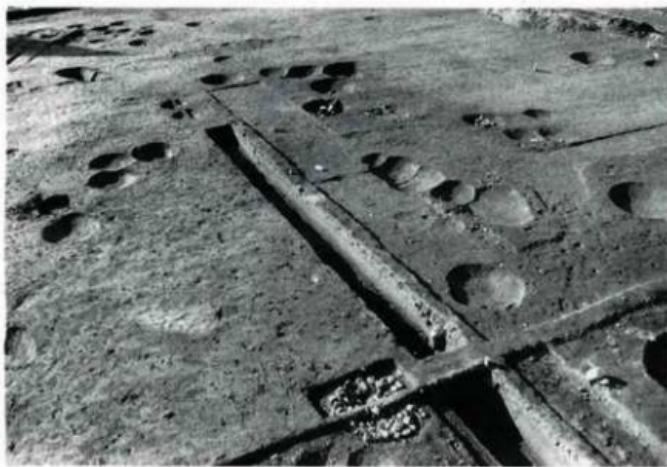
上菌遺跡H南区（掘立建物）



上菌H地区（2号住居出土）土器



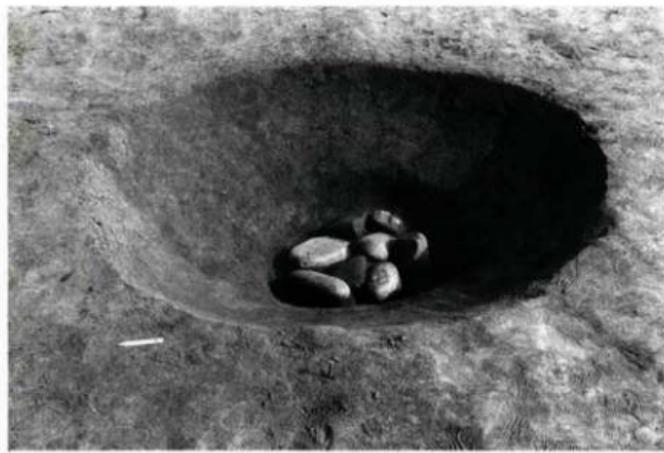
東牧B遺跡1号住居



東牧B遺跡集石造構分布狀況



東牧日遺跡 7号集石遺構



同上、掘り上り状況